

博士論文要旨

論文題名：高適研究

——高適集の版本と事跡研究を中心として——

立命館大学大学院文学研究科
人文学専攻博士課程後期課程
タナカ ミヤコ
田中 京

本研究は、唐代詩人高適について、高適集の版本及び高適の開元年間の事跡を中心に考証を行なったものである。盛唐を代表する詩人である高適について、高適集の版本や伝記に関して、高適集版本の実査結果や、新資料に基づいた網羅的な考証を行うことで、高適の研究に対して新たな知見を加えることが本論文の狙いである。

第一章では、高適集の版本について、東京・京都の国内および中国・台湾の国外の所蔵機関における、高適集の実査研究結果を中心として、論じた。高適集については多くの版本が現存しているが、その中でも大東急記念文庫蔵『高常侍集』残本は、唯一南宋臨安書棚本の刊記を有する。そのため、本章では主に高適集の諸版本の中でも大東急記念文庫蔵本について、実査結果に基づいた考証を行い、編集内容や本文の字句の異同を中国国家図書館蔵本や分体本系統本と比較・考察することで、大東急記念文庫蔵本は現存する高適集の中でもより古い形を残していることを明らかにし、その利用価値の高さを証明した。

第二章では、高適の家系や家族に関する事柄を、親族に関する六墓誌をはじめとした伝記資料を手がかりに検証を行なった。墓誌に関する考察から、高適一族の生没年や官位についてまとめ、家系図を作成した。その結果、高適の父崇文の玄堂記から、高適の生没年を特定し、高適は父崇文が高齢になってからの子であることが解明できた。そして、父崇文の没年とそれに関わる葬儀の時期の前後関係から、高適の開元年間の詳細な事跡を明らかにした。これらの伝記的資料の検証から、高適には仕官に際して援助を受けられるような有力な親族がおらず、なおかつ二十代で父親を亡くしていることが、官位を授かるまでに長い時間がかかったと要因であると考察した。

第三章では、高適が官職を得た手段が、制挙の受験によるものあったことに着目し、同じく制挙受験によって任官した杜甫と比較することで、高適の仕官に対する態度について論じた。高適と杜甫の制挙受験にまつわる事跡と、制挙の受験前に高官たちに送られた奉贈の排律詩を検討すると、二人の詩作に対して、制挙受験が内容の面でも形式の面でも影響を与えていることが判明した。両者の排律詩には、典故を多用して奉贈相手を賛美したのちに自身の引き立てを願うという構成をとること、十韻以上の長篇の排律の形式をとる

ことが共通点としてあげられる。そこから、両者は典故を多用して言辞能力の高さを示し、修辞上難易度の高い長篇の排律詩を作ることで、高官の目を引き、他の推薦を願う者達に差をつけようと試みたことが明らかとなった。

本論文では以上の分析から、高適集の版本について網羅的な研究結果を得て、その中でも大東急文庫蔵本は高適集の中でも唯一の南宋版本であり、その資料的価値を明らかにした。また、高適の事跡に関する研究では、親族に高官がいなかったことや、若くして父親を亡くすなどの状況が高適の求官活動に影響を与え、その結果、制挙受験によって官職を得るという選択をし、制挙受験のための特徴的な詩作を行うに至り、高適の開元年間の事跡がその後の作品制作にも影響を与えたと考察した。